

レフェリーレポート

- 初のブロック大会を経て -

河野 真育

1. 参加大会

第73回全九州高等学校ハンドボール競技大会

日時：令和5年6月16日(金)～6月18日(日)

場所：大分県 レゾナック武道スポーツセンター 他

2. 審判会議での確認事項 審判長：石崎章弘氏（長崎県）より

競技規則第8条を軸に基本的な事項の再確認と、国内および海外試合の映像をもとに解説と確認が行われた。許される行為と許されない行為、加えて罰則の適用等（接触部位、程度、影響）を詳細に説明いただいた。失格だけでなく報告書付きの可能性も当然考えられるため、レフェリングをする上では当たり前だと考えてしまう点の再確認をすることで、改めて今大会に向けて気が引き締まるものになった。

3. 担当試合における気づきと反省（他者からのアドバイス）

●大会1日目：6月17日(土)

○女子1回戦 佐賀清和 22-19 熊本国府

前半は熊本国府が2点リードで終了したが、後半では佐賀清和の逆転からそのまま逃げ切るという展開であった。開始直後にイエローカードを適用したが、7mTの判定まで下す勇気が出なかった。前述を含めて度々ペアの領域に踏み込んでしまい、笛が被ってしまっている場面が多々あった。

後半に佐賀清和のシュートのリバウンドをそのまま同チームが捕球したが、ゴールエリアライン内に留まっていた熊本国府の選手のホールディングがあり、フリースローを判定してしまった。ゴールに向かうような素振りがあればすぐにエリア内防御の判定を下し7mTをと準備をしていたが、何も起こらないままであったのでうまく対処できなかった。終了後にコートの上で不正使用であると助言を頂き、各事象に対する規則の適応力の低さを感じてしまった。

また、レフェリーのジャッジに対しての選手やベンチからのリアクションにうまく対応することができず、観客にも両ベンチにもストレスフルな展開を続けてしまったように思えた。

○女子2回戦 国分中央 28-12 佐賀清和

前半中にルーズボールに飛び込んだ両チームの選手の顔同士の接触が起きたことで、両チームの雰囲気と会場の空気が沈んでしまい、そのまま試合終了まで空気を取り戻すことができなかった。選手および観客の盛り上がりにも欠ける展開となってしまう、ゲームをコントロールする力が乏しいと感じた。私自身もこの接触によってうまく試合に入り込めず、1試合目の反省点であった領域の吹き分けもうまく修正することができなかった。これにより、ジャッジに対する説得力がないとベンチにも感じさせてしまったように思える。何事にも毅然と対応する心持ちもまだまだ足りていないと感じた。

接触や危険な行為に対しては積極的に介入していくことが当然に必要で、事故を未然に防ぐことができるのならそれが一番である。しかし今回のように、何かが起こってしまった後の対応に関しても入念なイメージ、想定、準備をしておく必要があると考えられる。

●大会2日目：6月18日(日)

○女子準決勝 大分 33-18 千原台

前半から大分によるラインを上げたDFに対して、千原台の攻撃がうまく決まらず得点差がついていく展開となった。そういった中で攻め上がろうとしているチームに対して不必要な笛が数回起きてしまい、スピーディーな展開というものをうまく表現できなかった。両チームのDFが狙っていること(ターンオーバー等)を的確に判断しなければならない一方で、ボールではない体に対するアタックをうまく捌ききれないところがあった。

1試合を通して、どこかで何かを吹かなければという意識が出過ぎてしまい、ゲームに前のめりになり過ぎているという助言を頂いた。これにより前述のような捌き切れないことも起こってしまい、もっと俯瞰的に事象を捉える必要があると感じた。また、立ち姿や姿勢、振る舞いにも影響が出てしまったため、レフェリーのあるべき姿を見直す必要もあると考えられる。

4. 他レフェリーを観察して

多くのレフェリーを観察して気づいたことは、選手とのコミュニケーションの円滑さと基準づくりの丁寧さである。開始直後に許される度合いを丁寧につくり上げていて、またその基準を選手ともうまく共有していることで、多くの時間帯で両チームともメンバーが欠けているということが少なかった。また、その基準がペア間においてもブレることなくゲームが展開されており、パワーバランスに関しても大変勉強になった。

他にも、レフェリーとしての所作の美しさを感じることができた。一つ一つの動きやジェスチャーがとても丁寧であり、見習いたいと感じた。プレーの予測が早く的確であることで、余裕を持った所作が生まれるのではと考えられる。

5. 今後の課題

今大会はやはり県内大会とはレベルが大きく異なっており、そこに適応していく力が必要だと感じた。若手審判員ではあるものの、これから上級を目指す上ではより多くの経験をより高いレベルで積まなければならないと感じた。

絶対的な軸は当然に必要なと思うが、ただ規則を適用していくのではなく、円滑なコミュニケーションを行うことで、ゲームをうまくコントロールする術を身に付けなければならない。これにより選手やベンチと共にプレーの基準をつくり上げていかなければならないと考えた。

県外にも一緒に出られる明確なペアレフェリーがいない分、いろいろなレフェリーと組んで経験ができ、意見を聞くことができるため、これからもより知見を広げ、研鑽を図っていきたいと感じた。

6. 終わりに

今大会が初めてのブロック大会で、初日の審判員会議からとてつもない緊張感があったものの、大会役員や補助員、ペア、他レフェリーなど多くの方々の支えにより乗り越えることができた。課題も反省も数えきれないほど出てきたが、得られたものの価値を大切にしたいと思う。たくさんの助言を頂いたことで、自分の現在地を客観的に見ることができ、これからまた頑張りたいと思える励みとなった。

決勝戦の吹笛が叶わなかったことはやはり悔しさが残る。まだまだ未熟ではあるが、この大会で得られた経験値をこれからの活力にし、今後の大会ではより成長した姿を見せられるよう精進しなければならない。「一気に経験値が上がることはないが、一度得られた経験値は失われない」大会後に頂いたこの言葉を胸の一つずつ課題を克服し、レベルアップしていかなければならない。

最後に、大分県ハンドボール協会の方々をはじめとした九州各県および今大会に関わられたすべての方々のおかげで無事に全日程を終えることができたことに感謝して結びとする。